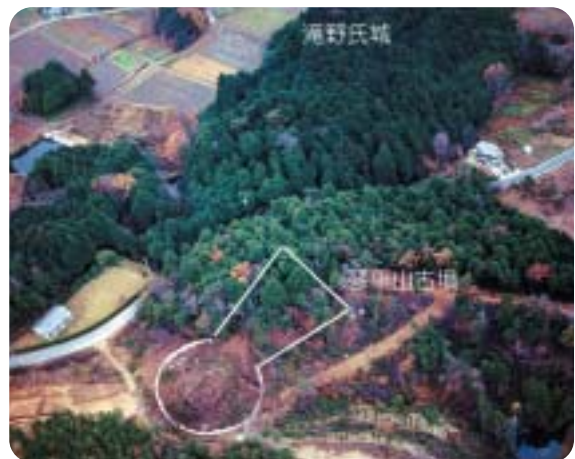


名張市史だより

名張市総務部 文書行政室 市史編さん担当

琴平山古墳(赤目町檀)の調査



左上／羨道部（入口から玄室への通路）
左下／羨道部 遺物出土状況 手前が剣・奥が胃
右上／豎矧鉾留衝角付胃（たてはぎびょうどめしょうかくつきかぶと）
右下／琴平山古墳の航空写真（平成5年撮影）

旧名張郡（*馬塚のある美旗地区は旧伊賀郡）で最大かつ最古の前方後円墳・琴平山古墳に葬られた人物は、名張で最初に政治的統合を果たし、首長として君臨したと考えられます。

全長七〇mの琴平山古墳には三基の石室が造られています。後円部の石室は、全長九・五m、玄室は幅二・四m、長さ四・五m、高さ二・七mの大きさで、六世紀初頭に築造された畿内型の初期横穴式石室です。羨道は、入口が立石で閉塞され五枚の天井石が奥に行くに従い低くなっています。

玄室内は、崩落した壁石で覆われていますが、羨道から剣、胃と直刀が見つかっています。胃は、豎矧鉾留では国内で最古級、剣は七〇cmで赤鞘、直刀は一二八cmと県内でも最長であり、こうした武器の副葬からも、被埋葬者は軍事に深く携わった人物であることがうかがえます。

なお、現地説明会で配布した資料を市史編さん担当のホームページに掲載していますので、ご覧ください。

（考古部会 門田了三）

名張市史だより

伊賀国の誕生

古代部会 荊木 美行
(皇學館大学史料編纂所教授)

古代の行政区分では、名張郡は阿拝・山田・伊賀三郡とともに伊賀国を構成しています。では、この伊賀国は、いったいいつごろ建置されたのでしょうか。

伊賀国の建置のことは、『日本書紀』には洩れています。『他』の史料にはみえます。『先代旧事本紀』がそうです。同書、巻十のいわゆる「国造本紀」には、孝徳天皇朝には伊勢国に属したが、のちに天武天皇の治世に分



『風土記残編』(荊木所蔵) いわゆる総国風土記の写本だが、これには伊賀の記載はない

す。

『先代旧事本紀』は、九世紀後半に完成したとみられる書物ですが、右の記事をふくむ巻十「国造本紀」は、巻五「天孫本紀」とともに独自の古い記録にもとづいており、史料の価値が高いとされる場所です。ただし、伊賀国云々については、いったん成書化されたあと加筆された部分だと思われま

す。『先代旧事本紀』には天武天皇朝とあるだけです。建国の時期をいいますし詳しくのべている本もあります。たとえば、『扶桑略記』は、天武天皇九年(六八〇)七月のこととして、「割伊勢四郡」建伊賀国」として記述しています。同様に、『倭姫命世記』崇神天皇六十四年丁亥条では、倭姫命が神霊を伊賀国隱市守宮に遷幸して二年間奉斎したとする記事の

あとに、「伊賀国。天武天皇庚辰歳七月割伊勢国四郡立彼国」と注記しています。『倭姫命世記』のこの分注は、のちの追補だといわれていますが、おそらくは、前出の『扶桑略記』のよ

うな年代記からの引用でしょう。記事もよく似ています。こうした天武天皇朝説は、『伊賀国風土記』逸文にもみえています。

もつとも、風土記といつても、和銅六年(七一三)の風土記撰進の詔をうけて提出された、いわゆる古風土記ではありません。それに擬して作られた後世のもです。天武天皇朝説を伝えた『伊賀国風土記』(①類)は、今井似閑が『萬葉緯』において採択したものです。『伊賀国風土記』は、ほかに数種類確認されています。

たとえば、『萬葉緯』には、いま一つ『伊賀国風土記』からの引用として、「伊賀国者。往昔属伊勢国。大日本根子彦太瓊天皇御宇。癸酉。分而為伊賀国。」云々という記事が採録されています(②類)。①・②は、

いずれも『萬葉緯』では風土記残篇(いわゆる日本総国風土記)に包括されていますが、偽書だといわれる他の総国風土記とはおよそ体裁の異なるもので、古風土記とはいえないまでも、なんらかの古伝承を伝えたものでしょう。

ただ、②が建国を孝霊天皇朝としている点は、これまでみてきた他の史料と大きくちがいます。

たしかに、『新撰姓氏録』右京皇別下の「阿保朝臣」条には、垂仁天皇朝に、皇子息速別のために伊賀国阿保村に宮室を築いた伝承がみえていますし、『日本書紀』宣化天皇元年(五三六)五月には、阿倍臣・伊賀臣を遣わし伊賀国にあつた屯倉の穀を運ばせたという記事があります。ですから、こうした記載にもとづかざりでは、伊賀国がはやくから設置されていたとみることも可能でしょう。

しかし、これらの国名は、のちに伊賀国が誕生してからのその知識にもとづいて書かれたとみるべきで、右の史料によって、

名張市史だより

伊賀国建置の時期を必要以上に古くみることは難しいと思います。

詳しくのべる余裕はありませんが、『扶桑略記』等が、天武天皇九年（六八〇）に伊勢国を割いて伊賀国を置いたとしているのは、かなり信憑性が高いと思います。

壬申の乱（六七二）では、隱郡をはじめとし、伊賀地方が重要な舞台となります。このときすでに伊賀国が存在したとすれば、その国司の動向が『日本書紀』にしるされるはずですが、それがまったくみられません。

天武天皇二年（六七三）に壬申の勲功を賞されている紀阿閉麻呂を伊賀国司とする説もありますが、彼は、乱後も伊賀に留まっていたというだけで、国司だという確証はありません。

ただ、この紀阿閉麻呂が伊賀における有力者であったことは、事実です。天武天皇九年（六八〇）に伊賀国が置かれたことも、在地の実力者である彼が同三年（六七四）に歿したと無関係ではないでしょう。彼の死を契

伊賀国府跡より出土した墨書土器「国厨」の墨書によって、国庁の存在が裏づけられた



機に、律令政府による地方支配が強化され、その結果として、「国」が設定されたと考えられるのです。建置が、紀阿閉麻呂の死後、六年を経てからと、時期的におくられるのは、岐阜大学の早川万年先生が推測されたように、壬申の功臣であった阿閉麻呂への配慮があったからではないでしょうか。

名張旧家の資料整理に携って

本間 宏

（資料整理担当員）

名張市の民間信仰の調査に引き続き、旧家の資料整理に携っています。以前は江戸時代末期から明治のものが主でしたが、最近では江戸中期が主で寛文年間（一六六〇年代）のものもあります。内容は当時の生活に関する証書類が一番多く手紙・蔵書と多岐にわたっています。私の場合、まだ文化財として取り上げられるような資料には出会っていません。藤堂家の公式文書とは異なり、借用・預かり・売り渡し・受け取り等の証文から武士・庶民の生活の一端を垣間見ることが出来、またそこに記載された地名の字名に今まで知られていないものがあったり、また年代と村名からいつの時代には存在していたとか、交流の広さに興



資料整理の作業の様子

味深いものがあります。書体に関して言いますと明治時代のもので一番大変ですが、手紙の場合どの時代も、大変くずされ特に名前には難渋しております。石碑でもありますが年号と干支が合わないものもあります。蔵書なども実に幅広い分野にわたっており先人の勉学に頭が下がる思いです。まだまだ市内には古文書が残されていると思いますので散逸しないうちに提供していただき整理できたらと思います。家庭の内部に立ち入らない先人を顕彰するような書状、図面などは了解を得て公開できればと思います。

名張市史だより

東大寺文書の原本調査から

中世部会 綾村 宏

(京都女子大学教授)

中世部会では、現在東大寺文書を市史の史料編でどのように扱おうかを思案しています。名張市域には、中世、東大寺領荘園である黒田荘や玉滝荘がありました。そして黒田荘は、荘園の歴史を研究するうえで、代表的な荘園の一つです。そのことを物語る膨大の量の古文書が、奈良の東大寺に所蔵され、国宝に指定されています。

史料編では、それら黒田荘や玉滝荘に関する東大寺文書を全て、活字にして収録するのがオーソドックスな編集の仕方かと思いますが、関係文書の点数が多すぎて、載りきらない可能性があります。また、古文書の文字ばかりが活字で紹介されても、研究者にとっては大いに有効な書物でしょうが、市民の皆さんがどのように思われるかが気になります。

そこで、現在は、名張の歴史を年譜で追って、歴史の区切りになる事件の日付と、その関係古文書の内容を要約した綱文を項目として掲げ、そのあとに古文書の原文と読み下し文、解説を収めるような史料編を作ろうかと考え、それに向けての作業を行っています。

ここでは、その作業のなかで、どのようなことに気をつけながら作業をしているかをご紹介します。

ところで東大寺の荘園関係の文書は、寺領荘園が自作や買得により拡大増加してくると、当然その点数が増えてきます。当時、その土地の所有は、自己の所有地になったことを示す証文や公文書を保持していなければ認められません。したがって東大寺も、それらの文書を印蔵という倉に納め大切に管理し

ていました。平安末期には、寛信という僧が、久安・仁平頃（一一四五〜五四）に文書を唐櫃に整理して納める作業を行っています。これは、朝廷側からの荘園整理の政策に対抗しての方策でもあります。このとき巻物にされたものうち、そのときの装丁のまま現在に伝わっているものもあります。

しかし黒田荘関係の文書で一通毎のままの文書も当然多くありました。それらのうち宇陀川右岸の矢川・中村地域の自作地域の分は、仁安三年（一一六八）までに八巻の巻物になっていました。そして左岸の黒田本荘などの文書も、治承四年（一一八〇）一〇月付の黒田荘文書目録によれば八七通が七巻の巻物として成巻されていたことがわかります。このとき成巻されている文書も、長寛三年（一一六五）黒田荘文書目録によれば、その段階では、まだ巻物ではありませんでした。このように東大寺の寺院経済を支える寺領荘園関係の文書は、大切に保管され、さらには巻物にされ、唐櫃に入

「おきつもの名張 今と昔」
定価八〇〇円で販売しています
市制五〇周年を記念して刊
行した、名張の一万二千年を
自然・歴史・暮らしで学ぶガ
イドブックです。

規格は、B5判、縦型、一
部カラー、二〇九頁です。

文書行政室市史編さん担当
事務所（丸之内五四番地の八）
で販売しています。



れられ、大切な印章を収める倉に収蔵され、さらにはその出納の時々に出納記録が作成されて、管理されていたことが知られます。

それらの文書の写真を見てい

名張市史だより



上は興福寺との争論、下は矢川の土地の文書で、年代は異なるが、それぞれ関係文書10通以上を集めて、同筆で写され巻物にされている

るうちに、外題に「黒田庄証文第一卷十七通」「黒田庄証文第二卷十一通」とある、文書群をそれぞれに写した二巻の巻物の筆跡が同一なのが気になりました。『大日本古文書』では、端裏書の筆跡は同一と指摘していますが、本文も同筆だったのです。それらは治承四年の文書目録の第一卷・第二巻の記載と一致しますが、つてこの古文書群は、ずっと未成巻であったのが、治承四年までに成巻され、さらには治承四年から後に写しが作成され

たのではないかと思われます。なぜ写しが作成されたのでしょうか。それは治承四年十二月に平家による南都焼き討ちと関連があるのかもしれない。また「第一巻」と「第二巻」の巻物の特長ある筆跡の筆者が誰であるかが判明すれば、より作成の意味が判然とすることになります。今後、このようにできるだけ原本や写真を見てわかることから、名張の歴史、そして黒田庄・玉滝荘の歴史を探りたいと思っています。

民俗部会の活動報告

民俗部会 櫻井 治男

(皇學館大学社会福祉学部長)

民俗部会では、名張で暮らす人々のあいだで受け継がれてきた慣習をはじめ、伝承されている生活上のさまざまな様子を知り、私たちが今に生き、これからの時代に生きていく知恵や心のありどころをふり返り考えてゆく材料の記録化をめざしています。伝承文化とか生活文化と言われるものが対象ですが、そのために「昔のこと」や「昔から伝えられてきた事柄」をご存知の方々からお話をうかがい、また実際に行われている様子を拝見して教えていただくことにつとめています。もちろん、単にお話しを聞くばかりではありません、文献資料として記録化されたものや生活の道具、また地名や日頃は見過ごされるような石碑などを通して甦ってくる記憶にも注目し、これらを生活の総体の表現として、理解することにつとめています。

名張市では、昭和四十三年に中貞夫氏により『名張の民俗』という本が刊行され、また『名張市史』にも民俗に関する事柄が記されています。ただ、それがまとめられた時代と現在とは社会の様相や民俗もずいぶん変化していることがあります。また、新しく造成された団地に、さまざまな生活慣習をお持ちの方々が各地から住まわれ、新たな民俗が創造されるという場面も見られます。こうしたことにも注目して行きたいというのが部会員三名の願いです。

民俗を記録するといっても内容は多岐にわたります。そこで、部会では民俗編の構成について「つきあい」「つながり」「ふれあい」の三つをキーコンセプトに民俗事象を捉えてみようと考えています。まだ構想の段階ですが具体的な内容として、(1)水と人々のくらし、(2)土と人々

名張市史だより



子安地蔵（名張市赤目町檀）

のくらし、(3) 木と人々のくらし、(4) 「ふれあい」と「ことば」、(5) マチとムラのつきあい、(6) 時と人々のつきあい、(7) 記憶の中の民俗、という七つの枠組みをたてました。

この中で(6)について少しふれてみましょう。ここでは、①毎日のくらしと儀礼（民俗信仰）、②年中行事、③祭り、④人生儀礼、⑤造替遷宮の五項目を設定しましたが、実際に調査をしてみますと、毎年繰り返し行われる祭りや行事は名張市域全体を見渡すと色々と興味深く、貴重な伝承行為もいかがわれま

す。例えば、今は少なくなりましたが、端午の節句（五月五日）には鯉幟（こいのぼり）を建てたり、菖蒲・蓬の束を軒に刺したり、粽（ちまき）をつくる習慣も残されています。しかも、この行事日を旧暦で実施している場合があります。このことは、新暦と旧暦という二つの流れの「時」とのつきあい方が保たれていることが分かります。また、粽づくりもモチを巻く茅（ちがや）が程よい大きさに育つには新暦の端午では早すぎ、旧暦の頃になると使い勝手がよいという、自然の摂理に従った季節（とき）とのつきあいがふさわしいという意識が読み取れます。このような生活感覚は、私たちに大切な生活のあり方を伝えて

いるように思われます。ところで、名張では秋祭が多彩で、大和地方と比較すると共通した内容やここ独自に発展した行事も見られます。また、正月とお盆の頃の行事も意外に盛んですが、七月〜八月に各地区で行われる「夏祭り」は内容的にも多彩です。これは必ずしも旧来の地区で行われているだけでなく、新しく形成された団地やコミュニティでも見られます。市のホームページで見ますと、平成十八年の「夏祭り」は



薬師堂の夏祭り（名張市安部田坂之下区）

三十二ヶ所で実施されており、ずいぶん盛んな様子がかがわれます。本年度は部会員で数ヶ所の行事を拝見しましたが、新しい団地ではさまざまな工夫を凝らして地区の賑わいを演出されていますし、旧来の地区でも「晋に比べて子どもの数が減り・・・」という声がかかりますが、露店を出したり、区民の方々が集い

歓迎するなどコミュニケーションの機会ともなっています。お盆過ぎの「夏祭り」には子ども

の成長と関わりの深いお地蔵さんの縁日とつながりを持っている例が見られます。これなどは、

やってくる時間と、人の一生のなかで通過してゆく「子ども時代」という時間との二つの「時」とのつきあいが体験されているようにうかがえます。

民俗の調査には、市民の皆様がご提供くださるいろいろな情報が重要です。これからもご協力のほどをお願い申し上げます。

（市史編さん担当より）
現在、文書行政室市史編さん担当では、平成二〇年度に「資料編考古」、平成二一年度「資料編古代」の発刊を目指しており、以後、順次に他編を発刊できるような資料の調査・収集作業を進めています。

また、歴史資料をさがしています。古文書や明治・大正・昭和の記録、写真、古い本などをお持ちのかたはお知らせください。ご協力をお願いします。

編集発行
名張市総務部
文書行政室市史編さん担当
〒五一八〇七二八
名張市丸之内五四番地の八
（電話）
〇五九五（六四）二二四九